Hesse の《Narziß und Goldmund》について

藤 井 啓 行

Herman Hesse の作風を，第一次世界大戦(1914～18)を境に大別して二つとする分けかたを行うとして，これまですでに私は，その「前期」より続く進展を踏まえつつ，「後期」の作品系列の中で，主として《Demian》(1919) や《Siddhartha》(1922) などの長篇小説[1]を中心にして彼の作家としての特質を探ってきた。[2] 今回はそれらをうけ，小説《Narziß und Goldmund》[3]を素材として，ディヒター Hesse の本質になお深く迫っておきたいと思う。

みずからの散文作品を目して《Seelenbiographien》とする Hesse[4]にとっては，やはりいわゆる長篇の小説がその本領をいっそうよく発揮していると思われる。それにしても，《Siddhartha》に続いてここで特に上の作品を選んだのは，ほかでもない，端的に言って，今の私にとってはそれがとりわけ大きな興味をそそる深い魅力を湛えているからである。

《Narziß und Goldmund》——この作品における第一の主役は Goldmund と見て，以下煩を避けるため題名を《Goldmund》と略記する——は，作者が前作《Der Steppenwolf》(1927) を書き終えるやすぐ執筆され，その翌々年までかかって書き上げられたのち，1930年に始めて単行本として出版されたのであった(作者53才)。なおこの作品は，それにさきだって《Neue Rundschau》誌上に連載されたときは，《Geschichte einer Freundschaft》という副題をもっていた。もっとも，この副題は本になるときには除かれている。しかし，アポロ型の代表，精神の人 Narziß と，ディオニソス型の典型である官能の子 Goldmund，あるいは思索家と芸術家と言ってもよかろうが，この二つのすぐれて美しい人物の，あこがれに満ちたすばらしい友情の歴史，物語が作品の主軸として貫いていることに変りはない。

《Goldmund》は，作品の量の上では，Hesse の小説の中で最大のもの《Das

Glasperlenspiel》(1943) に次いでいる。そしてその中に数々の体験がいっぱいに投げこまれ表現されているわけだが，これらの体験はきわめて大胆で，また深く純粋である。さらに，全篇に認められる円熟した技巧と，特にまた洗練された文章の美しさで，《Goldmund》は，Hesse の作品の中でももっともすぐれたものに属するということができよう。そこには，読む者の心をとらえてうっとりと酔わせるような力が秘められている。この小説の世界はまことに匂うばかりである。偉大な西欧の遺産と伝統との守護者であると評される明敏な文芸評論家 E. R. Curtius も，Hesse の作品中もっとも美しいものとして絶賛をおしまない。彼は1950年に出たそのヘッセ論(《Kritische Essays zur europäischen Literatur》, Hesse の項) の中で，《Goldmund》について次のように述べている。

„Das Ganze ist ein wundervoll farbiges Bild aus deutschem Mittelalter, in dem Romantik und Realistik verschmolzen sind. Fruchtig, duftend, rund, in sich selbst ruhend, ohne Lehrhaftigkeit und ohne Problematik; buntes Gewebe ewiger Lebensmächte, getränkt mit zauberischen Essenzen, die uns an Arnim, Tieck, Novalis gemahnen — aber durch geheime Blutsverwandtschaft, nicht durch literarische Anleihen oder altmeisterliche Patina. Kein Werk von Hesse hat größere Anwartschaft darauf, in den Bestand unserer Dichtung einzugehen. Es ist ein ganz deutsches Buch ...“

実際この作品は，舞台をローマン的な中世の騎士時代にとって，その雰囲気は「魔術的エッセンス」に深く浸されながら，しかもまたそこには，作者の純粋な人間形成，写実的な叙事性も明らかにうかがわれる。この作品は，Hesse がその運命のあらゆるモティーフ，すなわち芸術家，友人，恋人，永遠の母などといったその本来のテーマをすべて今一度つかみ上げ，それらをアポロ的な澄んだ光の中へとかかげたものであるが，その際，作者が従来の狭い意味での自伝的告白をできるだけ超越しようとつとめているらしいこと[5]は，注目に価するものと思われる。Narziß と Goldmund 両人物の造型も適確であり，具象性に欠けるというようなことはない。その心理的葛藤の深刻さにおいて Strindberg を思わせる (Hugo Ball: Hermann Hesse. Suhrkamp Verlag, 1947. S. 127.) 芸術家小説《Roßhalde》(1914) は，Hesse の

作品の中では，性格描写の鋭さや客観的・立体的な構成という点でかなりに注意をひくものだが，そこでも脱しえなかった感情の過剰さは，《Goldmund》では冷静な頭脳によって賢明にも抑制され，客観性がさらに推し進められている。ただし，さきにあげた《Seelenbiographie》の語が広義においてこの作品にもあてはまることは言うまでもなく，ここでも作者の目は強く人間の内面世界へ向けられていて，「魂の発展」をあとづけることがやはり主眼となっているのはもちろんであるが。

なおこの小説の中でも，例の精神分析学的な手法[6]の駆使されているのが目につき，またそれが作品の魅力を増す上に大いに効果をあげていると考えるが，その点については Thomas Mann も深く著目しているところである。Hesse と Mann，この二人の文豪相互の間の，深い友愛と尊敬の念の交流については衆知のことと思われるが，このことは，Hesse の側にあってはその数々の書簡などにうかがわれるし，また Mann のほうについて言えば，とりわけアメリカ版《Demian》への序文という体裁のその Hesse 論 (1947)[7] の中などに，はっきりと証左があらわれている。Mann はこの中で，《Goldmund》を比類なく純粋な興味深い小説と見て，その特質に簡潔に触れている。すなわち彼によれば，この作品においては，本来抒情的・牧歌的詩人である Hesse 持前のローマン的な色彩，ドイツ的な心のこもった夢想性などと，性欲学的深層心理学と深い関係のある心理分析的要素などといったあまり情緒的でない性質のものとが，きわめてしっくりと個性的に結びついているのである。これは Mann にとってと同様，われわれにとっても一つの非常に魅惑的な精神的逆説である。

ところで，この小説《Goldmund》は，前作《Der Steppenwolf》とよく対比させられるのだが，たしかに《Steppenwolf》は，不協和音に満ち陰惨なものとして読者には敬遠されがちであったようで，この点，一般的にも受けのよい《Goldmund》とは対蹠的であるといってよい。その間の事情としては，この二つの作品が書かれた折の作者の健康状態には相違があり，また《Steppenwolf》の背後には，この小説刊行の年に離婚した第二番目の夫人 Ruth との危機が思い合されるのに対して，《Goldmund》の背景としては，Ruth に代ってすぐ登場してきた女性 Ninon Dolbin[8] との心楽しい日々のことなどが当然考えられるであろう。しかしながら，そういった対照がこの二つの作品の価値を云々するものでないのは，ここで言うまでもないことである。

《Goldmund》もまた，《Steppenwolf》と同じく——というより，むしろ Hesse の小説一般に見られるように——人間存在の二元の問題を取り扱う作品であることに変りはない。《Steppenwolf》が，一個の人物の中で「二つの魂」の矛盾に苦悶させているのに対し，《Goldmund》では，それが，この「二つの魂」を二個の人物の中に振り分けた上での協調の世界に置きかえられているだけのことである。ついでながら言うと，Mann はさきに挙げたヘッセ論の中で，《Steppenwolf》については，その大胆な実験的性格の点で，James Joyce の《Ulysses》(1922) や André Gide の《Les Faux-monnayeurs》(1926) にひけを取らぬ小説であるとして，大いに推奨している。それに何よりも，作者 Hesse 自身が上記について以下のようなことをその手紙の中で述べているのは，やはり留意すべきではないかと思われる。まず 1930 年(《Goldmund》刊行の年）の 7 月《ある読者に》宛てた手紙の一節には，次の如く記されている。すなわち，読者が作家に対してその最近作についてのお祝いの手紙をよこしてくるときには，大抵はそのあとに，その作家の何か他の作品について否定的な意見をつけ加えるものだとして，——

„Wer mir zum《Siddhartha》gratulierte, lehnte meistens den《Demian》oder den《Klingsor》ab. Wer den《Steppenwolf》liebte, der fand den《Kurgast》schwach. Wer mir Lobsprüche über den《Goldmund》sagte, der tat es meistens nicht, ohne durchblicken zu lassen, daß niemand mir auf den so unerfreulichen und mißglückten《Steppenwolf》hin ein so anständiges Werk zugetraut hätte.

Keiner dieser Leser würde einer Mutter in seiner Bekanntschaft sagen, er gratuliere ihr zu einem Kind wie der Anna, während ja allerdings der Emil und die Marie arge Mißgeburten seien.

Für den Dichter ist es wie für die Mutter. Für mich ist der Knulp und der Demian, der Siddhartha, der Klingsor und der Steppenwolf oder Goldmund jeder ein Bruder des andern, jeder eine Variation meines Themas. ... daß andre Leser im Goldmund nur den Narziß bemerken oder nur die Liebesszenen gelesen zu haben scheinen, daran bin ich unschuldig.“

ここで Hesse は，《Steppenwolf》も《Goldmund》同様，彼の他の作品と等しく彼自身の大切な産物であることを述べ，またいわゆる成功作《Goldmund》についても，その成功が読者のある偏った見かたによるものでないように願っていることを明らかにしたわけである。彼はさらに，《Goldmund》に対する一般の人々の読みかたについては，同じ年の11月《M・W夫人に》宛てた手紙の中で，次のように書いている。

„Das, was Sie und viele andre mir über den《Goldmund》schreiben, ist gut gemeint, trifft aber an allem vorbei, was ich selbst meine. Die Leser freuen sich über die《Harmonie》, und freuen sich, daß statt des schrecklichen《Steppenwolfs》jetzt etwas Angenehmeres von mir da ist, etwas, was zwar ein wenig an die Abgründe erinnert, sie aber nicht aufreißt, etwas, wobei man sich klug und wehmütig vorkommen kann, wobei man aber ruhig weiter Geld verdienen oder Kinder erziehen kann, denn es spielt ja im Mittelalter, und ist ja nur Dichtung, usw.

Für mich sieht es ganz anders aus. Rein künstlerisch ist der《Steppenwolf》mindestens so gut wie《Goldmund》, ... Das Problem des《Goldmund》ist das des Künstlers, ein furchtbares, tragisches Problem — aber der Leser ist ja selber nicht Künstler, er kann da gefahrlos aus der Ferne zusehen.“

たしかにこの小説の Grundton は「調和」と協調であり，Curtius の言うように，——みごとな文体を基盤として——《fruchtig, duftend, rund, in sich selbst ruhend, ohne Lehrhaftigkeit und ohne Problematik》であるだろう。その点で，文学的にさほど修練を経ていない読者が一読しても，もちろん思想的に多少難解に見える箇所も残りはしようが，とにかく大変美しいと感ずるのも十分納得のいくことである。しかしながら上の手紙の文面からもわかるとおり，作者はここで，彼が芸術家の問題と真剣に取り組んだこの作品を，読者がただ表面にあらわれた《Harmonie》にのみとらわれ，また自分には直接の関係がないものとして安易に読み流してしまうのを，どうも快く思っていない様子である。作者がここで扱った問題は，一個の人間としての芸術家のそれであり，永遠につながる象徴的な問題である。古いインドを舞台とした求道の書《Siddhartha》同様《Goldmund》においても，Hesse の意図がい

わゆる歴史小説を書くことにあったのでないことは言うまでもない。そこでは，のちの《Die Morgenlandfahrt》や《Das Glasperlenspiel》などと等しく，実は時空を超えたところに永遠の真実が求められているのである。（読後の印象は，全体として何か Märchen めいている。）したがって，読者もそこまで考え到り，想いを凝らして作者の真意をできる限り汲み取るようにつとめるのが，やはり本筋であると言わねばなるまい。

この作品の世界は，Hesse 自身が切実なインタレストをもって創作経験していることであり，しかもその経験は模倣的・惰性的ないとなみなどでなく，苦悩にみちた，真正の，古くして新しい経験なのである。このことに関連して，作者は1931年3月，《Stuttgart-Degerloch の Mia Engel 夫人に》宛てた書簡の中で次のように述べていて，興味深い。

„ . . . Aber die Aufgabe eines Dichters, wenigstens die eines Dichters von meiner Art, besteht doch weiß Gott nicht darin, sich ideale, vollkommene, erlogene, vorbildliche Figuren auszudenken und sie den Lesern vorzusetzen zur Erbauung oder Nachahmung. Sondern der Dichter soll (vielmehr muß, weil er nicht anders kann) dasjenige mit äußerster Strenge und Treue darzustellen bemüht sein, was zu erleben ihm selber möglich war, wobei ich recht wohl auch echte Phantasieerlebnisse gelten lasse. Mir ist von der Geschlechtsliebe und von der Freundschaft nicht viel mehr zu erleben möglich gewesen als im《Narziß》steht — daß diese Figuren und ihr Leben nichts Vorbildliches und Vollkommenes sind, ist mir klar, ich habe diesen Ehrgeiz auch nicht ...

Ich meine so: Die Kritik eines Autors hat nicht zu untersuchen: 《Ist der Inhalt eines Buches dem Kritiker bequem und lieb?》 Sondern: 《Hat der Autor sein Thema wirklich bewältigt?》 Mein Thema nun ist nicht eine Darstellung dessen, was ideale Menschen in der Liebe mögen erleben können, sondern das Stück Menschentum und Liebe, das Stück Triebleben und Sublimierungsleben darzustellen, das ich aus meiner Natur heraus

kenne, für dessen Richtigkeit, Aufrichtigkeit, Erlebtheit ich einstehen kann. So sehe ich es, ...“ ——下線は筆者。

しかもこの作品はまた，何ら晦渋なところなどなくまずは明快と言ってよいのだから，これらすべてのことが相まって，読者に感銘を与えるのもまた当然というべきである。そしてこの感動は，さきに触れた Hesse の真意を読者がよく理解して作品の世界の中に深く没入すればするほど，ますます強くなり，創造的にはたらきかけるようになるものと思われる。

もちろんこの小説に対しても，読む側のつねとして，「欠陥」をいくつか指摘しようと思えば，できないことではない。表現の技巧の面で冷やかにあれこれと「分析」すれば，「批評」する者の主観に応じて種々様々な見解もたてられようというものだ。そうした見かたをここでするならば，細かいことは別としても，まず何よりも筋書の上から考えて，この作品のあまりにも整然と秩序づけられた構成は，均斎がとれているという意味で美しい反面，場合によってはある種の不自然さをおぼえさせることもまた事実である。しかしここでもまた私が持ちだしたいのは，例の《Symbolik》という観念である。Hesse の作品におけるその意義については，すでに私が Demian 論や Siddhartha 論ででも言及したところで，いわば最後の切札のような感じがせぬでもない。もちろんこうした便利な言葉をもって，明らかに黒としか認められぬものをすべて白と言いくるめるのは，牽強附会にすぎない。しかし広い意味での Märchen 作家という Hesse の本質を考えるとき，作品全体としての卒直な印象が「魂の伝記」としての深い感銘につながる《Goldmund》のような小説に対しては特に，やはりこの Symbolik の意味を重視する必要があると思うのである。できるだけそうした態度で作品の世界全般を読みとり，作者の真髄に何とか迫ってゆくことこそ，この場合読者のとるべき最良の道であろうと私には考えられる。

以上を前置きとして，ここで，《Goldmund》の世界へ具体的にはいってゆきたいと思う。使用テキストは，1957年，Hesse 80才の誕生日に Suhrkamp Verlag より記念出版された《Gesammelte Schriften》の第5巻，なお以下引用文の( )内は，もちろんこのテキストによる頁数をあらわす。

× ×

中世末期のとある修道院 Mariabronn で，美しくあどけない生徒 Goldmund は，敬愛する模範として若い学識ある僧 Narziß を見いだし，二人の間には深い友愛が生まれる。その際 Goldmund が友に寄せる気持は素朴で熱狂的だが，これに反して Narziß のほうは，自分の熱情に打ち克って，友を指導することに献身する。それは，洞察に恵まれた Narziß が，すべての人間（この場合は Goldmund）は，たとえ境遇の力がどれほど大きかろうと，それに逆らってでも自分自身の目的に向かって進んでゆかねばならぬ，ということを深く知っているからである。Narziß によれば，彼自身が属するのは精神であり教会であるに相違ないが，これに対して Goldmund は，実は Leben に属する者なのだ。

この作品の第四章と五章で，Hesse はわれわれに，Narziß が，Goldmund を熱愛しながらも，二人が天性をまったく異にする所以に十分通じていることを明らかに示してくれる。一例をあげれば，Narziß は言う。——

„《Gewiß》, sprach Narziß weiter. 《Die Naturen von deiner Art, die mit den starken und zarten Sinnen, die Beseelten, die Träumer, Dichter, Liebenden, sind uns andern, uns Geistmenschen, beinahe immer überlegen. Eure Herkunft ist eine mütterliche. Ihr lebet im Vollen, euch ist die Kraft der Liebe und des Erlebenkönnens gegeben. Wir Geistigen, obwohl wir euch andere häufig zu leiten und zu regieren scheinen, leben nicht im Vollen, wir leben in der Dürre. Euch gehört die Fülle des Lebens, euch der Saft der Früchte, euch der Garten der Liebe, das schöne Land der Kunst. Eure Heimat ist die Erde, unsere die Idee. Eure Gefahr ist das Ertrinken in der Sinnenwelt, unsere das Ersticken im luftleeren Raum. Du bist Künstler, ich bin Denker. Du schläfst an der Brust der Mutter, ich wache in der Wüste. Mir scheint die Sonne, dir scheinen Mond und Sterne, deine Träume sind von Mädchen, meine von Knaben ... 》“ (S. 51)

Narziß の考えによれば，Goldmund が自分を見習って努力するのは，結局無駄

であるばかりか，実は彼の天性にそむいて彼みずからを破壊することなのである。Goldmund が修道僧や神学者になろうと志しているのは，彼のうちに父が強引に築きあげた後天的な自我にすぎないことを鋭く見ぬき，これを打ち破って彼をしてその本然の自我の道をひたすら進ませることこそ彼に対する真の友情だと信ずる Narziß は，Goldmund がかぶっている「殻」を砕くため大いにつとめる。そしてこうした Narziß の言葉によって Goldmund は心の奥底から揺り動かされ，「殻」は砕けて，今やその中から，ほとんど忘れかかっていた母の思い出の姿がいきいきと甦ってくる。

ここにあらわれる Goldmund の母は，大きく輝かしく，花咲く口，王者の如き淡青の目，光を発するような髪をもった女性で，Goldmund にとって言いようもなく恋しい対象である。こうした母が，長いあいだ失われていた母が，ふたたび彼の所にやってきたのだった。それは大きな幸福だった。だが，母の誘いの呼び声はどこへ通じていたか。——

„Ins Ungewisse, in Verstrickung, in Not, vielleicht in den Tod. Ins Stille, Sanfte, Gesicherte, in Mönchszelle und lebenslängliche Klostergemeinschaft führte sie nicht, ihr Ruf hatte nichts gemein mit jenen väterlichen Geboten, die er so lange mit seinen eigenen Wünschen verwechselt hatte. Aus diesem Gefühl, das oft stark, bang und brennend war wie ein heftiges Körpergefühl, nährte sich Goldmunds Frömmigkeit. Im Wiederholen langer Gebete an die heilige Mutter Gottes ließ er den Überschwall des Gefühls, das ihn zur eigenen Mutter zog, von sich strömen. Häufig aber endeten seine Gebete doch wieder in jenen merkwürdigen, herrlichen Träumen, die er jetzt so oft erlebte: Träumen bei Tage, bei halbwachen Sinnen, Träumen von ihr, an denen alle Sinne teilhatten. Da umduftete ihn die Mutterwelt, blickte dunkel aus rätselhaften Liebesaugen, rauschte tief wie Meer und Paradies, lallte kosend sinnlose, vielmehr mit Sinn überfüllte Koselaute, schmeckte nach Süßem und nach Salzigem, streifte mit seidigem Haar über dürstende Lippen und Augen. Nicht nur alles Holde war in der Mutter, nicht nur süßer blauer Liebesblick, holdes

glückverheißendes Lächeln, kosende Tröstung; in ihr war, irgendwo unter anmutigen Hüllen, auch alles Furchtbare und Dunkle, alle Gier, alle Angst, alle Sünde, aller Jammer, alle Geburt, alles Sterbenmüssen.“ (S. 64—65) ——下線は筆者。

この夢の中における母の姿は，全篇を貫き流れる《Urmutter》なるイデーの発端として注目に価する。これは，明暗二つの極限をかね備えた，いわば母の Urbild である。

ところでここで性愛についての Goldmund の関係を見るに，その最初の青春の要求は，すでにこれより前，たった一度ながら長いお下げの少女とキスしたことによって強く呼びさまされたのだったが，Narziß の力のお蔭ではっきり目ざめた今の彼にとって，ここでジプシーの女 Lise との接触により，Goldmund の数知れぬ女性遍歴の真の第一歩が踏みだされるわけである。彼女は，初心の Goldmund をやわらかに手引きしながら身をまかせ，彼を始めての歓喜に導いた。そのことについて，彼は Narziß にこう言っている。

„Ich war auf den Feldern draußen und schlief in der Hitze ein, und als ich aufwachte, lag mein Kopf auf den Knien einer schönen Frau, und ich fühlte sogleich, daß jetzt meine Mutter gekommen sei, um mich zu sich zu holen. Nicht, daß ich diese Frau für meine Mutter hielte, sie hatte dunkle braune Augen und schwarzes Haar, und meine Mutter war blond wie ich, sie sah ganz anders aus. Aber doch war sie es, war es ihr Ruf, war eine Botschaft von ihr. Wie aus den Träumen meines eigenen Herzens heraus war da plötzlich eine schöne fremde Frau gekommen, die hielt meinen Kopf in ihrem Schoß, und sie lächelte mich an wie eine Blume und war lieb mit mir, gleich bei ihrem ersten Kuß fühlte ich es in mir schmelzen und auf eine wunderbare Art weh tun. Alle Sehnsucht, die ich je gespürt, aller Traum, alle süße Angst, alles Geheimnis, das in mir geschlafen, wurde wach, alles war verwandelt, verzaubert, alles hatte Sinn bekommen. Sie hat mich gelehrt, was eine Frau ist und welches Geheimnis sie hat.

Sie hat mich in einer halben Stunde um viele Jahre älter gemacht. Ich weiß jetzt vieles. Auch das wußte ich ganz plötzlich, daß jetzt meines Bleibens in diesem Hause nicht mehr sei, keinen einzigen Tag mehr. Ich gehe, sobald es Nacht ist." (S. 83—84) ——下線は筆者。

この場合母の呼び声とは，端的に言って，とりわけ性愛や官能の世界につながるものであると考えられる。そしてそれこそが，この際の Goldmund にとって人生への道，人生の意味への道なのであった。

一体この作品は，Hesse のものとしては珍しいほど濃厚なエロティシズムの空気に包まれている。実際，53才の作者の筆には，端々しいまでの光滑がみなぎっている。そこには血が脈うち，欲情がなまなましく息づいている。（もっとも，その描写は，Hesse 本来の資質にしたがって，やはりあくまで抒情的である。）《Goldmund》におけるこの作家の肉感的な若さについては，元来大自然に深くあこがれる一方また両性の問題にもつねに心を向けてきた Hesse の基本的態度が，年とともにまた数々の作品とともに円熟してその豊かな迸出を待っていたところへ，Ninon との心身を安らかにする交友が大きな推進力としてはたらいたと見ることができようか。いずれにしても，Goldmund が「母」の呼び声にひかれつつこの作品全体に満盈させてゆくエロティシズムは，彼にとって欠くことのできない必然の道程として，重視しなければならないと思う。もちろん，さきに引用した Hesse の手紙にもあるとおり，そのことにのみこだわるのもまた誤りではあるけれども。それはともかく，Goldmund にとって女性遍歴の第一歩となったこの Lise との交渉で，第6章89頁の終節からこの章の終りにかけてのくだりなど，まことにすがすがしくも神秘的な性愛の快い美しさに溢れている。その一部を次に引用してみよう。——

„Als er sich über Lises Gesicht gebeugt hatte und im Dunkeln ihre Lippen zu küssen begann, sah er plötzlich ihre Augen und die Stirn in einem sanftem Licht erschimmern, stauned blickte er hin und sah zu, wie der Schein aufdämmerte und schnell sich verstärkte. Dann begriff er und wandte sich um: überm Rand der schwarzen langgestreckten Wälder kam der Mond herauf. Wunderbar sah er das weiße sanfte Licht über ihre

Stirn und Wangen fließen, über den runden lichten Hals, und sagte leise und entzückt: 《Wie schön du bist!》

Sie lächelte wie beschenkt, er richtete sie halb auf, zog ihr sanft das Gewand vom Halse weg, half ihr heraus und schälte sie, bis Schultern und Brust nackt im kühlen Mondlicht schimmerten. Mit Augen und Lippen folgte er hingenommen den zarten Schatten, schauend und küssend; wie bezaubert hielt sie still, mit gesenktem Blick und einem feierlichen Ausdruck, als werde ihre Schönheit in diesem Augenblick zum erstenmal, auch ihr selbst, entdeckt und offenbar." (S. 90)

Goldmund にとっては，溢れる歓喜に陶酔しきっているその瞬間の Lise の表情や姿態は，学問や詩の言葉をたとえ一万語ついやそうとも，到底表現することのできないものなのだった ...

そして今やこうした姿でまず身近くあらわれてきた母の声が，抵抗しがたい力で Goldmund に呼びかけ，彼はそれにどうしても従わざるをえないはげしい内的衝動に駆られるのである。彼はここではじめて自分の本性をはっきりと認識し，みずからの運命をいちずに辿ってゆくことになる。

こうして Goldmund は，修道院と Narziß のもとを去って世界を放浪し，無数の女性の腕にいだかれて，女たちとの交わりの喜びに堪能する。Goldmund は，青年として優美さとあどけなさにみち，また長じては，美しく逞しい大人としてやわらかな上品さをそなえていて，またその声は，いつもやさしく愛を求めるようにあたたかく輝いている。しかも彼は，女たちから学ぶことに対して子供のように飽くことを知らない。そのあけっぱなしな所，欲望の好奇にみちた無邪気さ，女が何を求めてもいつでも応じる申し分のない構え，——これらによって，彼は女たちから熱望されたわけだ。こうして彼は女を多方面にわたって見，感じ，さわり，におうことを学んだのだが，またこの点に彼のさすらいの意味はあり，女と愛とを無数の差異を通じて完全に知りつくすことこそ，その天命なのでもあった。

内気だが力強く，むさぼるように愛にふける農婦，彼にはじめて女への愛情を自覚させた誇り高い騎士の娘 Lydia，姉へのはげしい嫉妬に駆られたその妹の美しい Julie,

親切な百姓女 Christine，農家の女中 Franziska，木彫師の娘 Lisbeth，また心やさしい不具の娘 Marie，情熱的な，褐色の髪の Lene，黒い燃えるような目と漆黒の髪をもつ，人になじまぬユダヤ娘 Rebekka，そして最後には，大柄の明るいブロンドの，総督の愛妾 Agnes，等々。これらの女性たちを配してそこに展開されてゆくのは，むせるような多彩な愛欲の世界である。

さて元へ戻って，――修道院の外へ出た Goldmund が種々の女たちと関係することは先述のとおりさが，そのいずれの関係も，長い間にわたって続くことを得ない。女たちとの愛のうつろいやすさ，歓喜の刹那々々のはかなさを深刻に体験しながら，Goldmund は放浪の旅を続けてゆく。その際，心の奥底にひそむ母への強い思慕が彼を牽いてやまず，それが変化に富むさまざまな愛の Leitmotiv となっている。そして，その時々に個々の女たちにひたすら打ちこみつつ，しかもその個々の女たちの快楽や苦悩を通じて，結局はおのずから「母」の本質を探し求め，そのふところに深く抱かれることがめざされているわけである。

こうしているうちに，やがて彼の中には，その魂にひそむ「母」の姿を正真の芸術作品のかたちで永遠化したいという，はげしい衝動的な欲求が生じてくる。それは，自分もすべての人も流れてゆき，たえず変化し，ついには融けうせてしまうが，芸術家によって作られた像だけはいつまでも変らず同じ姿を保ち続ける，と彼が考えたからである。[9] この芸術への意志を，Goldmund は，ある教会で聖母の柔和な神秘にみちた木像を見たときに忽然と意識する。その像の口もとに浮んでいる苦痛と法悦とを同時に表現した微笑に，強く心をひかれて感動するわけである。彼がこれまで放浪の途上で夢や予感の中にしばしば思いうかべたもの(母の微笑)が，そこにあらわされているように思えたのだ。そして彼は，その木像の作者たる師匠 Niklaus を訪ねて弟子となり，彫刻に励むことになる。ここに，かつて Narziß が Goldmund のうちに予見した芸術家が生まれでたわけである。

芸術家 Goldmund にとって制作の目標である母の顔は，その間にあって，かつてのそれとはとっくに同じものでなくなっていた。長い間のさすらいのうちに，それは徐々に変化し，深く豊かになり，複雑になった。その表情と色とが次第に，彼がこれまで愛されてきたさまざまな女性の顔をことごとく集めて一緒にしたような，もはや

個人的でない母の像に，つまり人類の母，イヴ (Eva; Urmutter) の像になっていたのである。

ところで，愛の歓楽の急激な燃焼とあわただしい消滅，——それが彼にとっては，人生のあらゆる悦びと悩みの象徴になった。そしてその悲哀と無常の戦慄にも，彼は心を打ちこんでひたりきったのだった。死と快楽とは一つであった。母もまたこの二つをかね備えたものにほかならない。——

„Die Mutter des Lebens konnte man Liebe oder Lust nennen, man konnte sie auch Grab und Verwesung nennen. Die Mutter war Eva, sie war die Quelle des Glücks und die Quelle des Todes, sie gebar ewig, tötete ewig, in ihr waren Liebe und Grausamkeit eins, und ihre Gestalt wurde ihm zum Gleichnis und heiligen Sinnbild, je länger er sie in sich trug.“ (S. 176)——さきの S. 64—5 の引用文後半部の明確化。

いわば生命の深淵に向かって跼んでいるこのイヴの顔が，彼にとって痙攣的なきらめきとしてあらわれてくる。——

„... er sah das Gesicht der Urmutter, über den Abgrund des Lebens geneigt, mit einem verlorenen Lächeln schön und grausig blicken, sah es lächeln zu den Geburten, zu den Toden, zu den Blumen, zu den raschelnden Herbstblättern, lächeln zur Kunst, lächeln zur Verwesung.“ (S. 186)

人類の母にとっては，何もかも同じだった。万物一切が，イヴにとっては等しくいとしいものなのであった。

ところで東洋思想への親近性とともに，あるいはそれと関連して，一般に Hesse の文学を貫いて目にたつのは，この《Urmutter》へのあこがれということである。これはいわば人類の魂のふるさととも称すべきものであろう。（このイデーの最初の基盤となったものは，やはり Hesse 自身の個人的な現実の母の姿であったに違いない。多血質で情熱的な母 Marie は，息子 Hermann に対して一種不思議な力をもち，精神分析にいう Magna mater のような dämonisch な力を彼の上に及ぼした。この神秘にみちた力が Hermann をずっと支配し続けていったのである。）《Demian》においても，迷える少年 Sinclair は，Demian の母 Eva 夫人の姿に彼の Traumbild

との深い一致を感じていちずに恋い慕うが，それも彼女の中に Sinclair が魂のふるさとを認めたからこそである。こうした母の原像はしかし現実に外にあるものではなく，結局われわれの心の中に住むものと見なければならぬから，母への模索はすなわち「内面への道」にほかならない。

さてところで，《die ewige Mutter, die uralte und ewig junge》(S. 194)において Goldmund が何とか表現したいと考えているのは，実は一つの神秘である。この神秘の本質は，他の場合には融和しがたい世の中の最大の対立，すなわち Geburt と Tod, Güte と Grausamkeit, Leben と Vernichtung とが，その形体の中では和解し共存している点にこそある。また別の見かたをすれば，本能的なものと純粋に精神的なものとの対立も，Urmutter の中においては，漂う和合のうちに形づくられているのである。かくして真の芸術もまた，単に精神的なものだけでは生まれえぬこと言うまでもない。そこには当然血の通う生命が伴わねばならない。Goldmund はすでにして，最高の芸術は精神と血との融然たる結合を意味することを十分に知っているのだ。かつて Narziß の力によって生まれた官能の児 Goldmund は，芸術家として成長したが，この芸術家は，友の見えざる導きにより，ここで期せずして，友の本来の領域である精神の価値をも創造的に認識しているのであって，これは注目すべき経過である。そして，先述の如く Urmutter の造型を念願する Goldmund が，ここで現実にまず精根を傾けて刻んだのは，遍歴の年月にあっても心の深奥で彼がもっとも愛してきた人物，まさしくこの友 Narziß の姿なのであった。ここで愛の人 Goldmund によって，知の人 Narziß が芸術作品としての形を得たわけである。

さて師匠は，彫刻家としての Goldmund のすぐれた技能を認め，彼に自分の娘をめあわせて有望な将来を約束しようとしたが，彼はそれを振り切ってふたたび放浪の旅に出る。市民としてある場所に定住し，そこに人生の「幸福」を味わうことなど彼は欲しない。やはりさすらいこそは彼の生命の泉であって，彼はどこまでも内なる母の声にしたがい，その母の姿をしっかりととらえて表現できるまで，世界を遍歴して体験を深めようとする衝動を如何ともしがたいのである。

それは陰惨な道となる。彼にとってこれまでの現実生活において支配的だった生の陶酔は，すさまじい死の経験にとって代られる。ドイツの諸地方ではペストが荒れ狂っ

ていた。Hesseはわれわれに，この破壊の図を強烈に，しかも冷静に示す。Goldmundはそれを貪欲なまでに眺めつづけ，死を恐怖の念なく大胆に認識して体得する。しかもこの世界のただ中にあっても，女たち (Lene や Rebekka) に対して彼の情欲はめらめらと燃え上るのである。ここで彼は突然すさまじい制作欲に駆られて，あの師匠の家の仕事場へと帰る。しかし，そこではすべてが変化していて，師匠は死に，美しかった娘はペストを病んですっかり醜くなっている。びっこの少女 Marie だけは昔に変らず彼を親切に世話してくれたが，彼は彼女から紙をもらって，自分が今度の放浪の途上出あった人々の顔をそれに描いた。以前師匠の家で形づくったものが愛と美と調和をあらわすものであったのに対して，今回は反対にそのすべてが死を象徴するものであるのは，注意を要する。最後の目標イヴのもとへは，もちろんこの明暗二つの方向を共にとって進まねばならないのである。

Goldmund はさらに，彼が生涯に出あったうちで一番美しい女 Agnes を得，その冷くととのった顔が愛の陶酔にもだえるのを見る。だが Goldmund は総督に捕えられ，死刑の宣告をうける。そして彼は地下牢の中で，直前に迫った残酷な運命に向かい，生か死かの血みどろな苦悶の一夜をすごす。（いかに死の実相を体得したとはいえ，やはりまだ Goldmund は，安んじて死に身を委ねる覚悟には達していないのである。）ところが早朝の光の中で，彼の前に一人の僧があらわれる。——それは永遠の友，精神と教会の王者 Narziß なのだ。愛情と理解にみちて，Goldmund をこの友は生の中へと連れてゆく。まさに死の直前において，運命はこの捕えられた男を幸福の頂へと引き上げたわけだ。（精神による，官能世界の昏迷からの解放。）これまでの長い年月の中にあって，この友人たちのあいだの深い不可思議なきずなが，決して引き裂かれず不壊のものであったという事実は，感動的である。

こうして Narziß とともに元の修道院に帰った Goldmund は，喜びに憑かれたようになって数々の比類のない像を作る。彼は，この友のそばでいつか Urmutter の像を形づくるという目標によって励まされる。

Narziß と Goldmund とは，その各々が本来の世界にみたされているのをはっきりと認め，それぞれ相手のうちに自分の模範を見いだすようになっている。Narziß は友が物を形づくる気持について通じ，また Goldmund は哲学による精神的世界の

征服に関してわきまえている。ところで Goldmund は，自分は母の世界に属するが故に，その点において友より豊かなのだと感じている。そしてまた彼は，王者のような Narziß の胸の中には，この母の世界に対する何か言いがたい，おそらくは一種絶望的なあこがれが花咲いているのも感じる。いつかこのあこがれは，Narziß の口から述べられねばならない。いつかこの不思議な友情の基盤は互いに明確にされねばならぬ。

Goldmund はしかし，——これを最後に——また放浪の衝動にとりつかれる。だが現実の愛欲は所詮はかなく，老いおとろえた肉体がかつての愛人にかえりみられない幻滅に，落馬し，彼は瀕死の状態で帰ってくる。しかし彼には，他にかけがえなく大切なもの，Narziß の友情が依然として残っている。今やはじめて，数々の苦悩のもとで成熟したこの二人の男は，彼らをあの最初の修道院のとき以来たえず結びつけてきたもっとも深いものについて，語ることが許されるわけである。

この僧の生活は，「愛」において貧しかったのだ。だが，Goldmund は彼にとって，その中における創造的な光明であった。愛が何であるかを Narziß が知っているとしたら，それは Goldmund のおかげである。Narziß が愛することができたのは，人々の中で彼だけだ。それは砂漠の泉を，荒野に花咲く木を意味するものである。... Narziß は言う。——

„Dir allein danke ich es, daß mein Herz nicht verdorrt ist, daß eine Stelle in mir blieb, die von der Gnade erreicht werden kann.“ (S. 317)

一方 Goldmund は，瀕死の床の中で感謝の思いにみちて，自分の生涯の半分は Narziß の愛を求めることであったと告白する。そして同時に，心をうたれた友の前で，Goldmund は今や，あらゆる生，あらゆる芸術の秘密を打ち明ける。

彼のこれまでの長い放浪，愛することや苦しみ，人間性全体は母への一本道だった。彼にとってこの母は，今はふたたび自分を引きとって虚無の中へと引き戻してくれるもので，これこそ甘美な死であり，大きな幸福である。母は到るところにいるのだ。——

„Sie war die Zigeunerin Lise, sie war die schöne Madonna des Meisters Niklaus, sie war das Leben, die Liebe, die Wollust, sie war auch die Angst, der Hunger, der Trieb. Jetzt ist sie der Tod, sie hat ihre Finger in meiner

Brust.“ (S. 321)

Goldmund はここで，自分が母をではなくて実は母が自分を形づくったのであり，そしてこの母がいま彼の胸から，悲しげにほほえみながら心臓を取り出しているのだ，と知る。母の美しい像をいつか制作するという彼の芸術家としての夢は，彼の存在とともに消滅するだろう。その神秘をあらわにすることを，母は欲しないのである。

Narziß は，こうしたことを述べる友の言葉に強く心をかきたてられる。彼自身の故郷はきびしく冷たい Logos だが，友 Goldmund は彼に生の全容を示しているのである。そして火のごとく，友の次のような最後のささやきが彼の胸の中で燃えるのだった。——

„Aber wie willst denn du einmal sterben, Narziß, wenn du doch keine Mutter hast? Ohne Mutter kann man nicht lieben. Ohne Mutter kann man nicht sterben.“ (S. 322)

Goldmund は死ぬ。同意し，満足して。その心は安らかである。ただ Urmutter の謎にみちた顔だけは彼の手に成らず，彼が死んだのちも生きつづけるであろう種々の像の中には含まれていない。イヴの神秘を表現しつくしてその豊かさを汚すのは，彼女の息子たる Goldmund にとって所詮許されないことである。息子にはただ，この母としての女神を，夢見つつ予感することができるばかりだ。このきわめて深く賢明なあきらめ，人間の運命の限界に対するこの諦念にあふれた同意は，悲しむ友への，Goldmund の畏敬にみちた最後の贈物である。

ここで考えるに，二人のすぐれた人物の，偉大な友情に包まれたこうした対話は，個人的な運命をはるかにたち超えて，われわれの運命についての問答にまで高められていると言うべきである。——この友情は官能的な色彩をも帯びていたのであって，そのことについては Hesse 自身も，さきに引用した《Mia Engel 夫人に》宛てた書簡の中で次のように言っている。

„Ich bin geschlechtlich《normal》und habe nie körperlich erotische Beziehungen zu Männern gehabt, aber die Freundschaften deshalb für völlig unerotisch zu halten, scheint mir doch falsch zu sein. Im Fall Narziß ist es besonders klar. Goldmund bedeutet für Narziß nicht nur den

Freund und nicht nur die Kunst, er bedeutet für Narziß auch die Liebe, die Sinnenwärme, das Begehrte und Verbotene.“ ——下線は筆者。

秩序を与える「父」の世界が，人間の魂において「母」の世界の中に歩み入ってくるとき，そこに「完成」が花開く。父なる友は守護者であり，彼は，愛と創造の陶酔が友なる直観の徒を破滅させようとするとき，その肩のまわりに腕をおいて，からだを支える。他方，思索者の上には，芸術家の母性的なあこがれの歓喜にみちた光が差してくる。こうしてただ愛のみが，われわれの心の中にある父と母との相争う原像を和解させることができるわけである。(そしてまたこのことは，Hesse の作品一般の基調であると言ってもよい。) この和合に向かって Goldmund と Narziß は迫ってゆくのだ。美しい作品《Goldmund》において，この矛盾が，Goldmund のみならず Narziß の側にとっても，作品の象徴的な結末の中で，いわば溶融していく方向が暗示されていると考えるのは，芸術作品に対する余計を解釈づけにすぎないだろうか。Narziß の胸の中で火のように燃えた Goldmund の最後の言葉，すなわち《Ohne Mutter kann man nicht sterben.》は，幾多の響きを読む者の魂に残しつつ，私の耳にも長く余韻を引いてついてまわっている。

以上《Goldmund》の世界を，その筋書に即しつつ跡づけてきた。ところで，この「魂の伝記」における Narziß と Goldmund という二個の人物が，それぞれ作者 Hesse の分身の象徴化であることは言うまでもない。またその際，芸術家 Hesse が Goldmund のほうを作品の中心に据えたのも自然なことである。この Goldmund においては，Peter Camenzind の瑞々しい自然感情や，とりわけ，あの魂にしみるような Knulp の終生の漂泊，また van Gogh を思わせる芸術家 Klingsor (《Klingsors letzter Sommer》の中) の熱情など，これらすべてが，官能の縦糸によって貫かれながら渾然として読みとられる。また他方 Narziß のほうは，のちに《Glasperlenspiel》においてあらわれる演戯名人 Knecht の前身ともなっているわけである。こうした観点からもいろいろな問題を探そうと思えば，もちろん容易に探すことができる。しかしそうしたことについて，ここではもう触れないことにしておこう。ただとにかく，この小説《Goldmund》においても，矛盾に富む混沌をとおして矛盾の調和をめざす

という Hesse の基本的な考えかたが，やはりよくあらわれていることだけは言っておきたい。

だがそういう問題は問題として，この作品にあっても，Hesse はまた何よりも表現を重んじる芸術家である。すぐれた芸術家にとってはこの態度は自明の理であって，Hesse 自身，《Späte Prosa》の中の《Aufzeichnung bei einer Kur in Baden》(1949) において次のような趣旨のことをくりかえし述べている。

„..., noch dachte ich ... daran, daß mein Buch, wie jedes dichterische Gebilde, nicht bloß aus Inhalten bestehe, daß vielmehr die Inhalte relativ belanglos seien, ebenso belanglos wie die etwaigen Absichten des Autors, sondern daß es für uns Künstler darauf ankomme, ob anläßlich der Absichten, Meinungen und Gedanken des Autors ein aus Sprach-Stoff, aus Sprach-Garn gewobenes Gebilde entstanden sei, dessen nicht meßbarer Wert weit über dem meßbaren der Inhalte stehe."[10]——下線は筆者。

これは直接には，この文の標題と同じような《Aufzeichnungen von einer Badener Kur》という副題をもった作品《Kurgast》(1925) —— 文中《mein Buch》とあるのは《Kurgast》—— について述べられた言葉には違いないが，また《wie jedes dichterische Gibilde》とあるように，当然創作一般に対する彼の所信を披瀝したものとも考えてよいのであって，きわめて注目すべき発言と見ることができる。

そしてさらに，直接《Goldmund》について後年の Hesse は，この作品の内容そのものよりもむしろ文章のほうに自身愛着を寄せていることが，1955年に出た Einzelausgabe の作品集《Bechwörungen》(Späte Prosa—Neue Folge) の中の小説《Engadiner Erlebnisse》において述べられている。[11] いかにも，この《Goldmund》にみなぎる，感性と知性とが渾然と融けあったスタイル，深い抑制を内に湛えつつも，新鮮な息吹が感じられ血潮の響きが耳搏つような文章，その文章の軽快な流れが醸しだすものは，心をひそめて読む者にはまことに大きな魅力である。

そしてこうした文章を書きえた詩人 Hesse のことを思い遣るとき，1913年彼がまだ36才のとき書いた，ささやかながらその文学の縮図ともいうべき逸品《Der Dichter》(作品集《Märchen》の中に収められている) の美しい一節が，おのずから私には浮

んでくるのである。

中国の青年 Han Fook は，世界を詩の中に完全に映すことができたときにのみ本当に幸福になれると感じ，完全な言葉の師を慕って山中にはいり，隠者の生活をおくりつつ詩作する。そして——

„er lernte langsam jene heimliche Kunst, scheinbar nur das Einfache und Schlichte zu sagen, damit aber in des Zuhörers Seele zu wühlen wie der Wind in einem Wasserspiegel. Er beschrieb das Kommen der Sonne, wie sie am Rand des Gebirges zögert, und das lautlose Huschen der Fische, wenn sie wie Schatten unter dem Wasser hinfliehen, oder das Wiegen einer jungen Weide im Frühlingswind, und wenn man es hörte, so war es nicht die Sonne und das Spiel der Fische und das Flüstern der Weide allein, sondern es schien der Himmel und die Welt jedesmal für einen Augenblick in vollkommener Musik zusammenzuklingen,...“[12)]

このような，言語を媒介とした陶酔境やあれこれを思い合せれば，やはり，さきほどあげた《Späte Prosa》における Hesse の言葉の真実性も考えないわけにゆかない。そして，これまでこの小論の始めから種々述べてきたことの前提としても，老 Hesse の叡智にしたがって，私はここで，《Goldmund》において，読む者はまず，言葉の紡ぐ糸から織りなされたそのみごとな形象を虚心に感得したいものだと思うのである。

註

1) 《Demian》は《Geschichte》と，また《Siddhartha》は《Dichtung》と付記されているが，もちろん常識語に考えて Roman（あるいは Erzählung）としておく。なお Hesse の他の長篇のうち，《Knulp》は《Geschichten》と，《Das Glasperlenspiel》は《Versuch einer Lebensbeschreibung》と付記されている。

2) 《Demian》——金沢大学法文学部論集，文学篇 3。《Siddhartha》——同 5。

3) この作品は《Erzählung》となっている。

4) 《Narziß und Goldmund》の執筆中に，自分の創作についての感想を述べた《Eine Arbeitsnacht》(1928, 12, 2) において，Hesse はこの規定をみずから行い，そして次のように記している。——„In allen handelt es sich nicht um Geschichten, Verwick-

lungen und Spannungen, sondern sie sind im Grunde Monologe, in denen eine einzige Person in ihren Beziehungen zur Welt und zum eigenen Ich betrachtet wird."

5) R.B. Matzig: Hermann Hesse. Reclam-Verlag, 1947. S. 102 参照。

6) Hesse は早くから無意識的なものや夢を重んじてきた。そして第一次大戦中，精神病医 Lang (C. G. Jung の弟子) との接触によって，彼が体系的に精神分析の方法を取りいれるに至ったことは，よく知られている。これは以後の彼の作品の方向の重要な一つを決定し，その直接の成果は，とりわけ《Demian》にはっきりとあらわれている。

7) 《Hermann Hesse. Einleitung zu einer amerikanischen Demian-Ausgabe.》(《Neue Rundschau》7. Heft, Sommer 1947.)

8) (1895—). 1931年，Hesse と正式に結婚。現夫人。

9) „Vielleicht, dachte er, ist die Wurzel aller Kunst und vielleicht auch alles Geistes die Furcht vor dem Tode. ... Wenn wir nun als Künstler Bilder schaffen oder als Denker Gesetze suchen und Gedanken formulieren, so tun wir es, um doch irgend etwas aus dem großen Totentanz zu retten, etwas hinzustellen, was längere Dauer hat als wir selbst." (S. 162—3)

10) Gesammelte Schriften, Bd. 4, S. 925—6.

11) Beschwörungen, S. 179. なおこの作品は，《Gesammelte Schriften》の中にはいっていない。

12) Gesammelte Schriften, Bd. 3, S. 292.

第 5 号　原 稿 募 集

枚　　数	50 枚 程 度
申 込 期 限	昭和35年 1 月31日
原 稿 メ 切	昭和35年 3 月31日
申 込 先	関西大学　独逸文学会